

福沢諭吉と^{ユキルジウン}俞吉濬の開化教育思想 に関する比較考察

魯 在 化

1. はじめに

韓国の近代思想というと、1876年（明治9年）開港を前後にして衛正斥邪思想と開国—開化思想をはじめとして、キリスト教と東学とが共にどのように展開して来たのかが注目される。西洋諸国は産業革命による資本主義の発達と共に、市場確保のため徐々に東洋へと勢力を拡大し始めた。このような時代の流れの中で閉鎖的である東洋も、異質的な西洋文明との遭遇を避け得なかった。一方、朝鮮の伝統的封建支配層の両班は西洋の近代思想の流入によって危機意識を感じるようになった。他方は、開明先覚者らは西洋の近代文物を受け入れ、国家を富強させることによってその自主独立を目指そうとした。

開明先覚者らは、まず、文明先進国に留学して見聞を広め、先進技術を習得して近代化を達成しようとした。彼らは伝統的な封建身分秩序を否定し、人間の解放、即ち人間の自由と平等を求めた。彼らは人民を啓蒙し教化して人智を広めるため、教育による近代化を最も重要視した。このような意識によって、彼らは内在的省察、つまり自己認識によって生じた近代意識と、外在的危機感によって生じた民族主義意識という二つの命題下で富国強兵と自主独立による近代ブルジョア国家を建設しようとした。

本研究はこのような目的意識の中で、伝統と西洋思想との差異—葛藤—受容—展開過程で次のいくつかの点に着目したい。1) 韓国の外来思想の受容経路、即ち中国、日本、西洋の宣教師による経路の中で、日本の経路に重点を置く、2) 開化教育思想家俞吉濬と福沢諭吉との交渉関係はどうようであったか。3) 韓末の民族私学とキリスト教学校はどのような精神をもっていかなる役割を果たしたのか。以上のような点について次の目的をのぞいてみたい。1) 伝統と近代思想との間で、知識人の役割はどのようになったのか。2) 韓国伝統的教育思

想と開化教育思想とはどのように関わりながら展開して行くのか。3) 俞吉濬の開化教育思想と福沢諭吉の教育思想との比較しその関わりを追求したい。4) 韓国教育思想史的側面から開化教育思想を高く評価し、教育思想史的位置を高めたい。

本研究の内容と範囲は、1876年韓日江華島条約が締結されてから、1910年(明治43年)の韓日合併までとする。本研究の資料としては、俞吉濬の開化教育思想が集大成された『西遊見聞』を含む『俞吉濬全書』全5巻と、『福沢諭吉全集』全21巻を中心とする文献分析を主として、それに加え、韓国両国の研究者らの研究書を参考とする。本研究の構成は序論で問題意識と研究内容等、東西文化の対応、韓国の伝統的教育思想、韓国開化教育思想、俞吉濬の開化教育思想、福沢諭吉の教育思想、韓国開化派と福沢諭吉との出会い、そして、結びとして俞吉濬と福沢諭吉の教育思想の比較となっている。

2. 東西文化の対応

われわれは、近代化過程において、どのように伝統と近代思想を融合又は両立させるかが重要な問題として取り扱うべきである。伝統とはある集団の思考方式、習慣、気風、信仰等がその集団の発展と共に、その時代のリーダーにより作られるものである。東洋に最も大きな影響を及ぼした儒教文化はわれわれの伝統の重要な基盤となって来た。東洋の伝統の儒学(教)思想が人間の徳性・省察等の道徳的儒理の側面に重点を、西洋の近代思想は理性・合理性・科学性、個人の自主性に重点を置いたと言えるだろう。このように時点が違う2つの文化の対応において、東洋は西洋文化の特性を理解することが急先務である。近代化にはいろいろな類型の近代化があるが、何よりも重要なものは近代人の属性たる人間自身の近代化である。この近代人を育成するために教育の必要性が創造的人間の全体的な生の表現で言え、未熟な人間を成熟な人間に引き上げる作用でカントの啓蒙主義にも一致している。

教育が人間の基本的人権で、近代人の育成の目的として法制化されたのは、日本は明治維新と共に、明治5年の「学制」の発布にであり、国家と国民生活の近代化という目標下で義務として最少限の教育が実施されていた。韓国では1895年(明治27年)甲午更張と共に発布された新学制と洪範14条で明文化した。

韓末において、少数両班階級のインテリゲンチャーは、西洋文物の流入と共に

に衛正斥邪型、急進的革命型、東道西器の自主的採西型の三つに分れて、それぞれ葛藤を起こしていた。開化と共に、両班階級の知識人は新しいインテリゲンチャーとなって、自主独立と富国強兵のための啓蒙と殖産興業を展開しようとした。日本は明治維新と共に徳川時代の知識階級の武士らは、明治政府の近代化政策を推進する新しい官僚ではたらいだ。特に明治初期の指導者らは学問と語学、それに直接的経験を通して文明開化の強い意志を表わした。

しかし、当時の学校教育は工業立国を教育基盤として近代化への手段とされ⁽⁶⁾た。また、近代化=工業化の教えについて、土屋は明治政府の近代化政策が脱⁽⁷⁾亜促進の教育に他ならなかったと指摘した。

3. 韓国の伝統的教育思想

韓国人の伝統的な教育意識は人間尊重の精神、敬愛の精神、協同の精神の三つの特徴で区別される。⁽⁸⁾人間尊重の精神と敬愛の精神は弘益人間、花郎道精神、儒仏精神、実学精神、東学精神等から把握できる。そして、協同精神は村祭り、デュレ（農夫らが農繁期にお互いに協力するために集まった集団）、郷約、契等から見ることができる。

特に弘益人間の教育観は古朝鮮開国の神話に見られる思想として、無教育状態にある人民を教化しようとする桓雄の教育的良心であり、貧求人世の現実的目標に弘益人間の理念を実現しようとした。この教育理念は1949年12月制定された韓国教育法第一条に再確認されていることで注目される。林漢永はこの弘益人間の理念をデモクラシーを含んだヒューマンイズム思想で取られた。⁽⁹⁾

4世紀に韓国に伝来された仏教教育思想は梵我一体説によって万物の神秘性を認め、人間がそれに自我を一致させる修行の道が教育である。人間が生老病死を越える道が仏教教育の目的である。この教育思想は教育対象者たる児童に消極的・禁欲的・否定的面を重要視され、教育方法も個人的な經典の口伝であった。⁽¹⁰⁾この仏教も徐々に護国仏教に変わって来た。

三国時代の仏教の全盛期において、儒学は官吏養成のための学問にすぎなかったが、高麗時代には理論的信仰的土合を確立し韓国の哲学的理論を構築した。この儒学は宋学と陽明学に発展して仁義礼智信の五徳に基づいた五倫の人格完成を儒教教育の至上目標とした。特に人間関係は忠孝悌を表わし、その中で孝を百行の根本とし、修身濟家治国平天下の哲学体系を備えて論語、孝経を

教授した。⁽¹¹⁾

17世紀に韓国に伝来されたキリスト教は利他的博愛精神を柱として、当時朱子学の世界に一大転機を与えた。このキリスト教は儒教と激しい葛藤の中で韓末の新しい文化創造に至大な影響を及ぼした。特に開化期において近代学校の設立による教育、医療業などの活動を行い、西洋の近代学問の受容に著しかった。このように、韓国の教育思想を宗教と結びついて考察したが、元来外来思想が伝来されて土着化されたことを把握できる。

4. 韓国の開化教育思想

朝鮮後期に、朱子学の中で性理学の空理空論の無用論を排判し実用性を重要視する実学思想は、西洋の先進文明を自主的積極的に受容しようとした。このような内発的要因による生まれた実学思想は、⁽¹²⁾ 3大学派が形成されて富国のために制度の改革、学風の刷新、国力の伸張という三点に要約できる。まず、16世紀から17世紀にかけて、柳馨遠、李滉、丁若鏞らの中心となった近畿地方の經世致用学派は、土地制度の改革、礼論・支配階級の腐敗・性理論の非生産的観念論的傾向の反対等の現実的經世学を展開して農業中心の理想国家論を主張した。

17世紀から18世紀中葉にかけて、朴趾源、朴濟家らが中心となった利用厚生学派（別名北学派と呼ぶ）は、商工業の発展、技術革新による生産力を増大させ、また清国を通じて流入される先進文物と技術を重視し国内産業の育成を図り、無為徒食している両班を批判し、身分制の廃止や教育の機会均等等利用厚生者の増進のための現実的改革案を提示し、富国安民論を主張した。この学派は後に開化運動の主役を演じることになった。

そして、18世紀中葉から考証学者の金正喜を中心とした実事求是学派は、実証的研究方法による文献学と民族文化の主体性認識等によって国学の発展に貢献した。この学派は開化運動を側面から支援した。

この実学の理論的な性格は西洋近代文明の受容による実用主義、民主解放、経済発展等の民族の再生のための近代志向的教育理念であり、民族主義的教育理念であった。学問的方法においては、自主性、科学性、現実性を尊重する具体的・帰納的・経験的な学問の態度が取られ自然科学的探究方法への転向で把握できる。この実学思想は千寛字が指摘したように後期朝鮮において前近代意

識から近代指向意識へ、また没民族意識から民族意識へ再構成された儒学の改新的思想である。⁽¹³⁾

次は実学と開化思想の連関問題に関してみて見よう。金泳鎬は、彼の論文「実学と開化思想の⁽¹⁴⁾ 連関形態」で2つの思想的連関を内面的論理として把握した。特に彼は上掲書で実学思想が開化思想に手渡した転換のきっかけについて両班の実学から平民の実学への転換という社会的側面と、実学の尚古の時観から現在志向、未来志向の時観への変化という理論的側面を鋭く把握した。そして、実学から開化への転向の橋梁的役割は利用厚生学派の朴趾源一朴珪寿であり、⁽¹⁵⁾ 朴泳孝、金玉均、俞吉濬、金允植に大きな影響を及ぼした。それに加えて、中人出身の呉慶錫、劉鴻基等を挙げられる。このように実学から継承した開化教育思想は新しい教育的側面が築かれた。即ち、①経済発展と国民厚生の増進、②民族の自主性と国権の独立確保、③人間の解放と民権の伸長の民主化という三つに分けて把握⁽¹⁶⁾ できる、これは教育による近代ブルジョアジー国家建設を目ざしていた。

そうすると、韓国において開化期の時点を考察して見る。開化期を近代化の基点として把握すると、開国という問題が提起される。開国とは「自己を外つまり国際社会に開くと同時に、国際社会にたいして自己を国=統一国家として画する」という両面性⁽¹⁷⁾ が内包されていると言うと、韓国は日本と違う。特に、開国（港）が西欧文物との出会いの意味で把握されれば、同一文化圏の日本によって、韓国が開港されたということから最も複雑な問題が出てくる。また、前述したように、近代志向意識と民族意識との相反する愛憎関係を持って、韓国の開化教育思想は展開していくのである。とにかく、韓国の近代化の基点は1870年代に間違いないだろう。

開化初期において形成された開化派について考察してみる。実学者の朴趾源の孫たる朴珪寿は彼の舎廊（書齋兼応接間）で祖父の『燕岩集』からの実学思想と平民思想を韓末の両班青年知識層たる金玉均、朴泳孝、朴泳教、俞吉濬、徐光範に教えたり、『海国図志』を分析しながら海外新事情と開化の必要性を強調した。また、仏教信者たる呉慶錫は漢医の劉鴻基と共に初期開化派に思想的指導者となった。特に、朝鮮の急進開化派と日本の福沢諭吉との中介者たる僧侶李東仁に注目すべきである。⁽¹⁸⁾ そして、開化教育思想に及ぼした外国の主要書籍⁽¹⁹⁾ は次の通りである。

- 1) 歴史・地理書：海国図志，瀛環志略，地球説略，普法戦記
- 2) 政治・法律書：朝鮮策略，萬国公法，興亜会雜事詩統，易言
- 3) 哲学書：格物入門
- 4) 新聞雑誌：申報，萬国公報，中西聞見録と格致彙編

韓国開化期において外来文化の受容経路は①中国経路，②日本経路，③西洋の宣教師による直接経路と分けられる⁽²⁰⁾。この中で日本経路による外来文化の受容経路に重点を置きたい。阿部洋の研究によると，韓末の日本留学を三つのピークに分けて見る事ができるが，第一のピークは1883年（明治16年）開化派の指導者金玉均の世話で，徐載弼ら約60余名の留学生が慶応義塾に留学して，日本語等と文明教育等が終わった後に，彼らは陸軍戸山学校や横浜税関，通信省等で実務教育を受けた。

しかし，この前に，1876年（明治9年）韓日江華島不平等条約を締結して，朝鮮政府は2次にかけて修信使を派遣し，朝鮮政府も自主的開化政策のために1881年政府組織を改編した。そうすることで，1882年に俞吉濬らの60余名で編成された紳士遊覧団が日本の制度と軍事施設，産業施設等を調査，視察したが，その団体の日程が終わった後に，俞吉濬，柳定秀は慶応義塾に，尹致昊は同志社大学に留学されることになった。

とにかく，朝鮮は日本を通じて西洋の近代技術文明と接することができ，韓国近代化過程における留学生は新学問，新知識を認識することができた。

特に，朝鮮に始めて「漢城旬報」の創刊等の人民啓蒙と，自由民権運動の近代啓蒙思想が強調された。また，教育による近代化や開化教育運動は学会設立と愛国啓蒙運動につながって教育救国運動化された。それに加えてキリスト系学校の設立が目だった。1910年5月学部認可済の私立学校の統計によると，宗教（ミッション）学校は820余校で全体の約40%に達している。特に，その中約70%が黄海道，平安道に集中していた。このようにキリスト教が韓国に定着することになったのはいくつかの原因があるが，その中で2～3個を挙げて見れば，次の通りである。一つは，封建的身分制から解放というキリスト教の神の前の平等思想を強く被支配階級に吹き込まれ，また，それが日本帝国主義侵略に対抗する民族意識の鼓吹へ発展した。もう一つは西洋の宣教師が先ず宣教よりも教育，医療，そして宣教の順序で彼らの宣教目的を行われたことが韓国人民に関心と呼びおこした。

朝鮮後期の開明知識人としては、朴殷植、申采浩、安昌浩、周時経などが注目される。

5. 俞吉濬の開化教育思想

俞吉濬は朝鮮哲宗七年(1856年)ソウル桂洞で両班俞鎮寿の次男で出生した。彼は家庭で漢学(儒学)を学んだ。彼は16歳時に朴珪寿に紹介され、金玉均、朴泳孝、洪英植らの開化青年と出会いから、漢学から開化思想に目を回した。彼は26歳時に紳士遊覧団の随行員で渡日して、公式日程後に、福沢諭吉が経営していた慶応義塾に入学し、福沢の文明開化論を学びながら、日本の先進技術文明を見聞して彼の思想を形成していた。俞は1882年に朝鮮で壬午軍乱が発生して、学業を中断して同年12月に帰国した。彼は漢城府判尹朴泳孝の要請で漢城旬報の刊行を推進した。しかし、彼は1883年7月全権大臣閔泳翊と共に遣米使節団の随員で渡米した。彼は福沢諭吉の紹介で生物学者 Edward S. Morse の自宅で起居しながら個人指導を受け、文明国の素顔を見聞しスペンサーの進化論を社会的進化論で教えてもらった。また、彼は1884年に朝鮮の甲申政変によって学業を中断し、文明先進国ヨーロッパ各地を遊覧して帰国したが、開化派によって起きた甲申政変のきっかけで捕盗大将韓圭嵩の私邸に軟禁され、1894年5月に解放されるまで十余年間幽閉生活を過ごした。しかし、彼は日本と米国、そしてヨーロッパの遊覧から見聞した文明の素顔と彼の文明論を韓圭嵩の配慮で『西遊見聞』に集大成した。この『西遊見聞』は1894年に福沢が経営していた東京銀座の「交詢社」で近代的印刷で刊行された。⁽²³⁾

『西遊見聞』は総555面で、第1と第2編は84面として世界の自然、地理である。第3から第12編まで243面で政府の形態と職分、人民の権利と義務等の政府の制度論である。第13から第18編までは西洋の学術、軍制、宗教の発達、社会主義とその制度と機械文明等の西洋の近代文明の素顔を総160面とした。そして第19から第20編までは67面で文明化された主要都市を紹介している。注目すべきものは第3から第18編まで政府の制度と西洋の文明論に沢山の紙面を割愛したことである。また、福沢諭吉の『西洋事情』の影響を沢山受けていることをわかる。しかし、俞の『西遊見聞』第14編「開化の等級」は彼の深い知識を含んだ思想で高く評価する価値があるし、彼の著作は西欧社会の実態を紹介した最初の本格的著述で新制度の認識と新しい意識の転換を意図した自由と権

利の理念が把握できる。⁽²⁴⁾

俞吉濬の開化教育思想はブルジョア近代国家形成のため教育による近代化をはかることに目的があり、最高の目標は自主独立と富国強兵であった。

俞吉濬は開化とは「人間の千事万物が至善極美する境域に抵する」と把握し、開化の種類は「行実の開化」「學術の開化」「政治の開化」「法律の開化」「器械の開化」「物品の開化」だと主張し、また開化を3等級と区別して「開化」―「半開化」―「未開化」と把握した。彼は開化を完成した国は世の中にないと論じた。⁽²⁵⁾開化と福沢諭吉の文明の概念とはすこしずれが見られるが、福沢の「文明」―「半開」―「野蛮」の三段階文明発達過程から導入したと思われる。⁽²⁶⁾俞は開化の種類を「実状開化」と「虚名開化」に分けて、「実状開化」を望ましい開化で主張した。また、彼は開化人間の類型を「開化の主人」「開化の賓客」「開化の奴隸」「開化の罪人」「開化の讐敵」、そして、「開化の病身」の6つに分類して把握した。そのうちに、彼は「開化の主人」が主体的・自立的開化の人間像で説明した。

俞吉濬は彼の『西遊異聞』第4編の「人民の権利」で天賦人權による人間の平等を主張し、これは伝統的封建身分制を打破して人間の平等と自由を保障し、民権の伸長による社会と国家を発展させようとした。特に、人民の権利は自由と通義で規定し、社会契約説的立場で法による支配であると主張して法治主義的思想を表わしている。また、彼はこのような思想を認識するために教育の必要性を主張した。その中でも、女性の教育を「女子は人世の根源であり、家屋の棟梁である」と論じながら国家発展の礎石で把握した。⁽²⁷⁾俞吉濬は教育の本意を「人間によって人間となる権利を知らせ、人間によって人間となる義務を知らせることによって人間の幸福を完全させること」を追求し功利主義的教育概念で規定している。しかし、これは學術の授与と品性の陶冶を主にして人間の知能を助長し徳義を発揮することによるものと言い加えた。

特に、俞は「子女は家を継承し、国家を守る者」と見て、子女を教育することは国民の義務と考えた。これは国家主義的教育論で臣民の義務規定であるが、あくまでも儒教の範囲をのがれなかった。教育の方法を文と言語そして、行実に置き、道徳に重点を示した。

俞は教育3大綱を正徳・利用・厚生の実学思想に置き、道徳教育、才芸教育、工業教育を主張した。⁽²⁸⁾彼は教育が国家の大本となり、国家の興亡盛衰を左右す

ると強調しながら、国民普通教育で取った。特に、彼は「⁽²⁹⁾学業条目」で「実状学業」と「虚名学業」の2つに分けて、「実状学業」を実用的学問で取られた。国家の最大の根本は実用であり、人民の最大の実用は工夫（勉強）する習慣にあると彼は述べた。この学問は彼が儒学又は漢学で見つけられなかった西洋の自然科学、人文社会科学を指している。

そして、俞吉濬の開化教育思想は民族主義的色彩が強く見られる。特に、「⁽³⁰⁾小学教育に関する意見」を通して見て見よう。俞吉濬が朝鮮国王純宗に上疏した文は小学教育における国文（ハングル）専主を主張した意見であり、民族正統性を確立することである。彼は小学を国民の根本教育で把握し、児童の良い習慣と性格を形成して将来に善良な市民となるための基本的教育で捉えた。小学教育の方法は①国語を以てすること、②国体に協力すること、③普及を図ることであった。小学教育が志向する人間像は思想の啓発、性質の陶冶、そして、気節の培励での知・情・意として捉えた。しかし、国文専主の実践的教科書は『労働夜学読本』（1908）と韓国最初の国文法書の『大韓文典』（1908）である。

特に、彼の『西遊見聞』は国漢文混用体であるが、漢文専用の当時においては画期的であった。なおさら、『西遊見聞』は韓末の教育啓蒙思想と教育救国運動における開化教育思想の指南書で民族私学等の修身テキストで採用された。

6. 福沢諭吉の教育思想

福沢諭吉は天保5年（1835年）豊前中津藩士福沢百助の末子で大阪の藩邸で生まれた。14歳頃から漢学の勉強を始めた福沢は、19歳時に砲術修業の目的で長崎に遊学して蘭学を学ぶことになった。しかし、蘭学に深い関心を持って熱心に研究した。後に彼は大阪で当時蘭医学の権威者であった緒方洪庵の適塾に入門して緒方の精神的感化を受け、近代日本の偉大な人物となったきっかけを作った。また、福沢は藩命で江戸に出て築地鉄砲洲の奥平家中屋敷の中の小さな長屋の一軒で蘭学の家塾を開いたが、それが慶応義塾大学の起源となった。彼は江戸に来てから蘭学から英学（語）へ転換することになった。特に、福沢は外遊の機会を得て、幕府の咸臨丸軍艦の司令官木村摂津守の従者で西洋の近代文明世界にはいることになった。彼は万延元年（1860年）から慶応3年（1867

年)まで7年間に3回にわたって西洋諸国を外遊することになった。特に彼の2回目の外遊でのヨーロッパ諸国の旅行記録を公刊したのが『西航記』であり、それが『西洋事情』のもとになった。彼は欧州旅行中に沢山の原書等を購入して来た。英語辞書、その他物理書、地理書、チエンバーズの経済書等の洋書であった。福沢は明治維新をむかえ、新政府の召命を拒んで、学校教育と著書記述に専念しながら、慶応義塾でウェーランドの経済書を講義⁽³¹⁾、『西洋事情外編』『訓蒙窮理図解』『兵士懐中便覧』等を刊行した。彼は1872年(明治5年)から7年にかけて『学問のすすめ』全17編を刊行して、日本の近代ブルジョア国家形成のために文筆活動と実践を通じて文明開化運動を展開したのである。特に『学問のすすめ』初編に自然科学的実学の重要性を認識させ、実験実証の実学、そして物理学に最も関心を見せた。彼の『自伝』で東洋は西洋に比べて数理学と独立心がないと述べた⁽³²⁾。また、1875年(明治8年)に三田演説館を開館して言論による自主性と独立心を培って、自己の主張を強く表わす力を養うようにした⁽³³⁾。福沢は1875年(明治8年)に『文明論之概略』を刊行して、日本人民の文明化における水先案内人の役目を果たした。明治13年に社交クラブ交詢社の設立、明治15年の時事新報の創立等の文明開化と富国強兵の近代化のために尽力した。

彼が逝去する1901年まで政治、経済、教育、文化、社会等のすべての分野にかけて著作物や論説文が2000余編に至って名実共に日本近代文明の産婆で重要な役目を果たしたことは誰も否定できないだろう。

日本人が洋学との最初の出会について、考えながら、福沢の文明像の展開を考察して見ることにしよう。まず、家永三郎は前の命題について次のように説明している。即ち、日本人の西洋近代社会との最初の接触は知識人による封建社会の反省か封建社会の補強の手段として利用するためかぐらいであった。そして、当時の文明啓蒙の課題は民衆の無知や社会的因習の打破、封建体制が根を下したすべての社会構造と意識構造の改革であったが、洋学に対する関心はその学問的性格よりも殖産興業と軍事上の目的のために要求されたと述べている⁽³⁴⁾。

明治維新と『西洋事情』について見よう。幕府時代に欧米を三度にわたって外遊するという幸運に恵まれた福沢はその旅から西欧世界を彼の開明的な眼で

見て、日本の近代化に焦点をあわせて『西洋事情』を構想した。彼は『西洋事情』初編の第一に政治について三つの様子を紹介し、その中のアメリカの共和制が彼の政治思想を決定づけることになった。特に、文明の政治と称するものには六ヶ条の要訣があって、それは自任意、信教の自由、技術学問の自由、学校教育の普及、保任安穩政治の安定、そして国民生活の向上であった。また、自任意の説明においては、士農工商の区別をせず職業選択の自由応じる封建身分制度の人間観をきびしく批判した。政治の条項につづき収税法、国債、紙幣、商人会社、外国交際、兵制、文字技術等の日常的な施設や制度と、ヨーロッパの文明国の史記、政治、海陸軍、錢貸出納の四項目に分けて論じているが、産業と経済はイギリスを、政治と軍事はアメリカを理想のモデルとしたことが分かる。『西洋事情』の特色は西洋文明国の制度や理念、社会状態⁽³⁵⁾に関心を持っていた。彼は日本の近代化の必要性を痛感し、西洋のブルジョア国家の社会を根本的に把握しようとして政治制度、経済制度、社会の諸施設に力点を置いている。しかし、この『西洋事情』が明治維新政府の政策決定にあって重要な指針となったり、封建制および絶対主義と市民革命の混沌の中でこれが世論の形成に重要な役割を果たした。また、福沢は初編に不足な部分を『西洋事情外編』に補充した。福沢の『西洋事情』は無学社会の指南であり、政府から一般国民に至るまで広く読まれた。特に明治政府によった「学制」頒布の後に、学校の修身教科書で採用されたこと⁽³⁶⁾だけでなく、当時朝鮮の開化人らに大変人気があった。なおさら、俞吉濬の『西遊見聞』もこの『西洋事情』を台本として著述された。

さらに、慶応義塾を開いた福沢は日本の文明開化のために積極的に人材を養成した。特に慶応義塾の教育特徴は个性的人間を目指し、教科課程と内容も個性的教科課程で編成され、演説、討論、体育を重視し、社会の人的交流を重要視し、開かれた学校として塾生みの学校ではなく一般市民にも参加できた。さらに、女性の教育も重要視したのは深い意味がある。福沢文明思想は『学問のすすめ』と『文明論之概略』によく現われてある。『学問のすすめ』は全17編で約340万部が国民の間で流布されたそうである。これは日本人民が文明国民にふさわしい知識を学ぶことによって封建社会の無知から脱出しようとすることを示している。この『学問のすすめ』の内容と性格は、人間の自由平等主義、独立自尊の精神、実学の精神、民間学問の振興、国家社会に貢献するこ

と、創造批判の精神、法秩序の厳守、身分徹廃と女性の解放、そして、弁論を養うこと等に集約される。この著作は全国の学校で教科書で用いられ、明治啓蒙期の青少年に大きな希望を与えた。

そして、『文明論之概略』と明六社に関して見よう。天賦人權思想の土台に人民と国家の平等を主張した福沢は1875年（明治8年）に『文明論之概略』を執筆して刊行した。これに先立って、1873年にアメリカから帰国した新進気鋭の開明的官僚森有礼の主唱によって啓蒙的学術団体たる「明六社」を設立した。この団体は社会的活動で演説会を開催し、その機関誌『明六雜誌』を刊行して、1874年3月から1875年11月までに43号を発し日本の啓蒙思想の注入に大きな役割を果たした。彼らは伝統的封建体制を否定し身分の徹廃による人間の解放と、西洋の近代精神を体得し新しい西洋の実学を重要視し、人智の啓発と人間性に基づいた功利主義思想と天賦人權と女性の解放による国民の意識構造拡大に貢献した。しかし、文明開化のために政府と迎合によるナショナリズムを形成する限界性を露呈した。

このような政勢下で福沢は『文明論之概略』⁽³⁷⁾を著述したきっかけとなった。読者の対象は若い世代より多くの経験を持っていた既成世代に読ませるためであった。⁽³⁸⁾勿論、この書で最も多くの参考になったのはミル、ウェーランド、バックル、ギソー、そして、スペンサーらの著作である。この内容は人の精神発達を衆人の発達で把握した衆心論である。文明を人間の智徳の進歩で捉えた。また、文明の発展の段階において、彼は「野蛮」―「半開」―「文明」として三段階式過程で把握した。広田まさきはこの『文明論之概略』こそ実学的合理主義精神の普遍性に確信しながら、日本の歴史的特殊性に伝統への反省と人民の個別性の身分解放を試みた作品だと評価した。⁽³⁹⁾特に、明治維新によって全国が統一国家形成と共に近代国家となる準備が行われ、明治4年の廃藩置県の断行に応じる封建社会の崩壊と近代ブルジョア社会到来の黎明を国民に告げて国民の覚星を巻き起せ、資本主義国家建設の基礎工作が行われるための教育政策が法制化されたのが「学制」（明治5年）であるが、福沢の『学問のすすめ』の影響に関する研究も注目すべきである。⁽⁴⁰⁾

福沢諭吉の教育思想は、彼の『学問のすすめ』と『文明論之概略』等によく見られたように、日本の啓蒙思想の代表であり、日本の文明開化に大きな貢献を果たした啓蒙教育思想であることは確かである。特に、伝統的男尊女卑の批判

と「男女同数論」の提唱等の女性の解放と女権の伸長に果した役割も注目される。福沢が日本の文明啓蒙に果した貢献は数え切れない。福沢の文明教育論において、西洋の文明を智徳の文明で評価し、文明は国民の智徳の全体的水準の常なる発達過程＝智徳の進歩のための〈衆心発達〉であると定義し、記憶（暗記）の教育を排斥し、全人的能力の発達(41)が教育の意義があると主張した。教育の内容は「小学教育の事」で日本語の仮名の日用、筆算とそろばん、技芸と道徳を論じている。また、彼の学問は前述したように実学的学問論である。(42)特に、福沢の『福翁百話』に多く見られるように、彼は自主的進歩主義を主張していた。福沢の全ての思想—「一身独立」—「一国独立」と富国強兵の啓蒙ないし進歩主義思想—が、結局、彼のナショナリズムに内在していた。

7. 韓国開化派と福沢諭吉との出会い

福沢諭吉は非常に朝鮮に関心を持っていた。今日、福沢の対朝鮮観に関してはあまり研究されていないが、福沢が日本帝国主義侵略を正当化したと批判が多いのである。彭沢周は福沢の朝鮮問題に対する基本的姿勢について①誘導教育、②東洋盟主論、③自国（日本）安全の三点を挙げているが、それらのために福沢は朝鮮への輸出品で「資金」と「人材」を提唱した。(43)しかし、福沢諭吉は、1881年（明治14年）朝鮮の紳士遊覧団が来日した後に、俞吉濬と柳定秀を慶応義塾に入学させた。阿部洋の研究のように（注21を参考）、朝鮮からの大勢の留学生を入学させた。(44)

1882年に朝鮮の壬午軍乱後に、朴泳孝と俞吉濬による漢城旬報刊行の支援のために、福沢は彼の門下生の井上角五郎、牛場卓造、高橋正信、そして印刷技術者らを朝鮮へ派遣した。「漢城旬報」は結局発行できなかったが、後に「漢城周報」の名で発行され、それらが韓国の新聞の嚆矢となっている。(45)

1884年に朝鮮の「甲申政変」に対して福沢の支援について見よう。福沢は1883年に朝鮮の開化派金玉均・朴泳孝らの依頼によって、徐載弼らの60余名を慶応義塾に入学させた。彼らは日本語教育を終えて、陸軍戸山学校、横浜税関、通信省などに実務研修を受けて、開化党の改革運動を積極的に支援した。しかし、1884年に金玉均・朴泳孝の主動によって福沢の支援を得て朝鮮政府の顛覆による国政改革を断行しようとしたが、この政変は三日天下に終わってしまった。この政変の失敗によって、日本、朝鮮、そして清国との三国関係はきびし

くなり、福沢の対韓観も変わり、彼は朝鮮人に対する差別意識を露骨した「脱亜論」を発表した。

甲申政変の失敗によって日本の亡命先から朴泳孝は朝鮮の国王高宗に「国政に関する建白書」を上奏した。⁽⁴⁶⁾この「上疏文」は福沢の『学問のすすめ』『文明論之概略』『西洋事情』の影響関係を分析できる。

このように、韓国の開化期における福沢の思想的影響は大変大きかった。

8. 福沢諭吉と俞吉濬の教育思想の比較

俞吉濬が26歳時に福沢と最初の出会ってから、慶応義塾に留学して、福沢による日本文明開化思想を学び、また、俞自身が西欧文明国の遊覧によって体得した文明開化論は、福沢の思想と相当ずれが見つけられる。

開化教育思想においては、俞は伝統の問題に深い関心を示し、開化を自己認識自己発見による自主的文化創造の概念として捉えた。福沢は伝統を、特に儒学を「親の敵」と批判し、文明開化を西洋の制度や理念に関心を示し、自己否定自己批判による革命的改革で捉えた。利用厚生の実学的実用的学問論を主張した俞吉濬に比べて、福沢は数理の原則を追求し殖産興業と文明開化に役立つ実証的実用的学問論を主張した。両者の思想的交渉関係において非常に類似点が多いが、福沢諭吉が西洋の制度、理念、思想の全てを根本的に把握し脱亜入欧の革命的改革論だとしたら、俞吉濬は東洋の伝統と道徳を重要視しながら西洋の近代文明を受容する東道西器の自主的採西論で把握できる。俞吉濬の『西遊見聞』は、福沢諭吉の『西洋事情』を台本として書いてあるし、そのもとで俞の開化教育思想と福沢の教育思想を比較して見た。開化教育思想は今日の韓国教育発展と韓国の教育思想史的側面で大変重要されなければならない。特にこれは日本帝国主義侵略下で韓国の教育抵抗運動と教育の近代化への先駆的役割を果たしたことを高く評価しなければならない。

本研究によって、開化期における福沢の教育思想が韓国の開化教育思想に与えた影響を追求することができた。これは本人の福沢諭吉研究の始じ書きとなったことが幸いだと存じる。

注

- (1) 柳承国「東西思想の特殊性と普遍性」『成均館大学東洋学学会語論文集』40頁 1972 ソウル。

- (2) 李奎浩『教育と思想』43頁『新教育全書5』培英社 1976 ソウル
- (3) I. カント『啓蒙とは何か』7頁 篠田英雄訳 岩波書店 1983
- (4) 文部省『学制100年史』113～165頁 きょうせい 1973
- (5) 文献備考『巻之209』学校考8 6—8頁 ソウル
- (6) 三好信造『明治のエンジニア教育』199・200頁 中公新書 1983
- (7) 土屋忠雄「近代日本教育の展開過程」321—323頁 『教育学全集3』所収 小学館 1967
- (8) 孫仁洙『韓国教育文化の理解』3頁 教育新書100 培英社 1981 ソウル
- (9) 林漢泳『韓国教育の比較研究』320頁 培英社 1976 ソウル
- (10) 韓基彦『教育史』51—52頁 法文社 1965 ソウル
- (11) 韓基彦 ibid 48頁
- (12) 李佑成の『実学研究入門』（序説）一潮閣 1976 ソウルと千寛宇の『朝鮮後期の実学概念』96—100頁『韓国史の再発見』所収 一潮閣 1975 ソウル
- (13) 千寛宇「朝鮮後期実学の概念評論」179頁『韓国史の再発見』所収 一潮閣 1975 ソウル
- (14) 金泳鎬「実学と開化思想の聯関形態」29—46頁『変革時代の韓国史』所収 東平社 1974 ソウル
- (15) 姜在彦『朝鮮の開化思想』21頁 岩波書店 1980
- (16) 金元姫『韓国の開化教育思想』38頁 載東文化社 1979 ソウル 開化教育思想を最初に体系的に分析した研究書。
- (17) 丸山真男『日本の思想』9頁 岩波新書 1976
- (18) 李光麟「開化僧李東仁」93—112頁『開化堂研究』所収 一潮閣 1975 ソウル
- (19) 李光麟『韓国開化史研究』26—34頁 一潮閣 1969 ソウル
- (20) 丁淳睦「新教育制度導入と教育観変遷に関する研究」17頁『韓国教育研究』所収 韓国精神文化研究院 1980
- (21) 阿部洋「福沢諭吉と朝鮮留学生」62—63頁『福沢諭吉年鑑2』所収 福沢諭吉協会 1975
- (22) 李瑄根『大韓国史』208—212頁 新太陽社 1973 ソウル
- (23) 福沢諭吉『福沢諭吉全書』21巻 140—144頁 岩波書店 1959
- (24) 鄭漢模「西遊見聞と俞吉濬の近代意識」同徳女子大学学報第60号（1972. 9. 30日号）同大学学報社 ソウル
- (25) 俞吉濬『西遊見聞』375頁第14編「開化の等級」（影印本）『俞吉濬全書』一卷 一潮閣 1971 ソウル
- (26) 福沢諭吉『文明論之概略』38頁『福沢諭吉全集』四巻所収 岩波書店 1959
- (27) 俞吉濬 ibid 427頁「女子待接する礼貌」
- (28) 俞吉濬 ibid 107頁「人民の教育」
- (29) 俞吉濬 ibid 347—358頁「学業する条目」
- (30) 俞吉濬「小学に対する意見」257—260頁『俞吉濬全書』2巻（詩文教育編）所収、俞吉濬が1907年亡命地日本から帰国して、翌年に朝鮮の国王純宗に上疏した文である。

- (31) 飯田鼎『福沢諭吉』81頁 中公新書 1981
- (32) 福沢諭吉『全集』7巻 167頁
- (33) 会田倉吉『福沢諭吉』196—7頁 吉川弘文館 1974と、会田の「演説と福沢諭吉」103—10『福沢諭吉年鑑1』所収 福沢諭吉協会 1974
- (34) 家永三郎「福沢諭吉」15頁『現代日本思想大系2』筑摩書房 1963
- (35) 遠山茂樹「福沢評価の問題点」191—194頁『論集・福沢諭吉への視点』所収 りせい書房 1973
- (36) 神山四郎『福沢諭吉選集』4巻「解説」岩波書店 1981
- (37) 福沢諭吉『全集』1巻 60頁
- (38) 福沢諭吉 ibid 60頁
- (39) 広田まさき『福沢諭吉研究』221頁 東京大学出版社 1976
- (40) 小松周吉「国民教育制度の成立」36—37頁『教育学全集』3巻所収、小学館 1967と、佐伯友弘「日本近代公教育における『学問のすすめ』初編の教育史的意義について—「学制」(1872)との関連において」『教育学部紀要』18輯 九州大学 1973年3月号。そして、安川寿之輔の『日本近代教育の思想構造』新評論 1970等を参考してほしい。特に、尾形裕康の『学制実施経緯の研究』校倉書房 1963と、本山幸彦『明治前期学校成立史』未来社1965は「学制」研究に重要な文献である。
- (41) 福沢諭吉『全集』4巻 465—529頁
- (42) 富田正文「学問のすすめ(上)」考証福沢諭吉(40), 43頁『三田評論』慶応義塾大学 1983年4月と、丸山真男の「福沢に於ける「実学」の転回—福沢諭吉の哲学研究序説」『論集・福沢諭吉への視点』所収 りせい書房 1973
- (43) 彭沢周「朝鮮事件と自由民権運動」48頁『歴史公論』ボックス9所収 雄山間書店 1981
- (44) 鹿野政直『福沢諭吉一人と思想』159頁 清水書院 1967
- (45) 福沢諭吉「午場卓造君朝鮮に行く」497—506頁『全集』8巻所収
- (46) 青木功一「朝鮮開化思想と福沢諭吉の著作」朴泳孝の上疏における福沢諭吉著作の影響—35—91頁『朝鮮学報』52輯所収